



信達の歴史シリーズ

～山と川的生活史

第1回 福島市のシンボル“信夫山”

村川 友彦 (むらかわ ともひこ)

福島県史学会
会長



今回より「信達（しんたつ）の歴史シリーズ 山と川的生活史」を連載いたします。
福島県史学会所属の4氏による新シリーズです。ご期待ください！

みやこには花もちりあへず陸奥の

しのぶの山は春風のころ

家隆 『新後拾遺和歌集』

忍ぶ山しのびてかよふ道もがな

人の心のおくも見るべし

業平朝臣 『新勅撰集』

福島盆地のほぼ真ん中に独立する信夫山は、信達地方の里人の生活に古くからかかわってきた山である。標高は275mの里山といえる丘陵である。

福島市民から「御山」と呼ばれ、親しみをもって見守られている信夫山は、自然そして歴史や民俗の宝庫としての山でもある。

今から約20万年前には地殻運動により地盤沈降が始まり、火山活動によりマグマが上昇した信夫山の岩石は硬く変質し、沈降運動によって完全には埋没せずに独立丘陵として福島盆地内に残ったとされている（『ふくしまの歴史』第1巻）。

このようにしてできた信夫山には、いつしか周辺の人々が神の住む山として崇めるようになり、

里人との深いつながりを持つようになった。

信夫山の周辺盆地一帯は、古く湖であったという伝説があり、信夫山は島となり神々を遠くから伏して拝んだといい、それが「伏拝」という地名になったという。また、舟で信夫山に参拝したときの「舟繋ぎ石」といわれる石がある。

信夫山には大きな岩が露出した場所があり、そこには祠や石碑が祀られている。大きな岩石や奇岩は、古く神の拠り所（降臨地）とされ、大岩は



あぶくま親水公園より信夫山を西方に望む



巨石が多い信夫山

磐座（いわくら）といい神を迎え、特別な祭祀場所とされてきた。その根底には巨石信仰などの自然崇拜があり信仰の要因となったのである。信夫山にはところどころに硬い岩石が露出し、この巨石を信仰の対象とするようになったと思われる。東の峯の熊野山の先にある巨石の立石山には、山の神の祠が立っている。西峯の月山神社近くにある「月山行場」と呼ばれる巨石群には、現在も祠や石碑が立ち並んでいる。信夫山は全体が神の山として崇められ、麓には祓川が流れ、神域である信夫山へ入る前に穢れを払うための潔斎する川である。

信夫山は、東から熊野山・羽黒山・羽山の三山からなり、西峯の羽山寺跡付近には月山神社・湯殿神社が祀られている。信夫山は数か所に寺院や神社、無数の石碑、摩崖仏そして墓地が広がる霊山である。里人の死者の魂が里山にやどり、里人を見守るといふ羽山信仰は東北一帯にみられ、福島市松川町金沢の羽山ごもりの神事は今も継承されている。信夫山では大正時代まで里人による精進潔斎のお籠りが行われていた。

信夫山羽黒神社は、その祭神を^{ぬなくらふとたましきのみこと}淳中倉太珠敷命（敏達天皇）と伝えられ、あるいは、淳中太命ともいわれ、欽明天皇（第29代）の皇位継承によって敗れた淳中太命を羽黒神社、その母石姫（石比賣）皇后を黒沼神社に祭ったと黒沼神社の縁起に

ある。しかし祭神には諸説があり、その由緒は縁起によるのみである。羽黒神社の祭礼には、母である石姫皇后が祭られている黒沼神社へ神輿が通ったという。

羽黒神社は、以前には羽黒山権現と呼ばれ、明治初期まで参道に仁王門があった。その仁王門に大きな草鞋が奉納されたという。それは里の農民が五穀豊穡を祈願し奉納したものであった。羽黒権現の祭神はまた、^{いなくらたま}稲倉魂（^{うかのみたま}倉稲魂のこと）ともいわれ、五穀の神であり、そして麓の黒沼大明神は水神である。農耕に欠かせない水と豊作を祈る神として、さらに祖先の魂がやどるとされる羽山信仰とが重なり、羽黒権現は古くから信達地方の総鎮守として里人に崇められてきた。

昭和15年（1940）、西峯の月山神社の近くにあった羽山寺跡の発掘が行われ、建物の金具のほか錫杖や花瓶などの仏具、そして藤原時代の和鏡を含む29面の鏡のほか宋元銭が多数発見されるなど、平安・鎌倉・室町時代の工芸品が多数出土している。また、会津塔寺八幡宮長帳（心清水八幡神社の日記 重要文化財）の記事に、応永21年（1414）11月3日、信夫羽黒山別当治部卿僧都御坊が、遷宮の重職である導師を務めたとあることから、このころ信夫山羽黒権現は会津地方にも知られるほどの勢力を持っていたことが分かる。

信夫山は別名青葉山ともいわれ、室町時代に掛田城主の懸田定勝が、信夫山に居館青葉閣を築いたとされ、応永20年（1413）、南奥羽に力を持った伊達持宗（松犬丸）と諮り、軍勢とともに大仏城（杉妻）に立て籠もり鎌倉府に反乱をおこしている。羽黒権現別当寂光寺は、伊達氏や懸田氏による手厚い庇護が背景にあったと推察される。反乱は城内失火により失敗している。

慶長5年（1600）、旧領奪還を目的に福島城を攻略するため、上杉家臣の福島城代本庄繁長との戦いで、伊達政宗は信夫山中腹黒沼神社付近の愛宕山に陣を構えたと『東国太平記』にある。しか

し上杉方の梁川城にいた須田大炊の攻撃により伊達政宗の軍は敗走し、伊達政宗に内通していた羽黒権現別当寂光寺の僧慶印も政宗に従い仙台へ移った。仙台を本拠地とした伊達政宗は、居城を青葉山と名付け青葉城の鬼門の守りとして寂光寺を建立している。

信夫山には即身仏があった。福島藩板倉家の古文書『万年不求覚書』に「羽山に登る途中に熊野権現があり、ここの自性庵という小庵の近くの洞窟から元禄16年（1703）に発見されたミイラがあった」とあり、これが即身仏であると記述されている。現在その痕跡は不明である。

信夫山には現在も「六供」といわれる人々が住み、それぞれに「持宮」といわれる小社を持っている。また、「七宮人」といわれる人々が周辺に住んでいた。六供は六く供奉の略称あるいは六供僧ともいわれ、羽黒権現の祭神になった淳中太命とその母石比賣（石姫皇后）が、奥州下向の時に供奉して来た人々という伝えがある。祭礼の時にはそれぞれの役があり、座列が定められていたという。また、後に仏門に帰し六供僧となったといい、それぞれ八幡院・山王院・祇園院・自在院・三宝院・一宮院を奉持したという。さらに七宮人は神人として奉仕し、信夫神楽の音楽を奉じたという。

また伝えによると、六供の祖先は山伏であったともいわれ、羽黒権現の別当の寂光寺は、信夫山伏の頭であったという（『葉山秘録』西坂茂『信夫山』）。

羽黒神社の本殿には、見事な彫刻があった。大工の金子周助が弘化年間に建築し、長谷川雲橋の彫刻があった。惜しくも昭和51年（1976）の火災によって焼失してしまった。

信夫山の東側にある摩崖仏の岩谷観音（福島市指定文化財）は、西国三十三観音像のほか地藏菩薩や普賢菩薩・不動明王など60体余の仏像が岩肌にもごとに彫られている。三十三観音像は宝永6年（1709）頃に刻まれ、諸仏の作者はわからない



羽黒神社と大わらじ

が、里人の敬虔な信仰が裏付けられ、巡礼の人々の信仰の深さを今に物語っている。

太平洋戦争が激しくなった昭和17年（1942）頃、都市部の空襲から逃れるため地方へ工場疎開が行われた。信夫山の地下には中島飛行機株式会社の疎開工場がつくられ、「福島フ工場」と呼ばれた。信夫山の地下工場はかつての金鉱を利用した大規模なもので、今に残る戦争遺跡でもある。

毎年旧暦の小正月のころ（2月初旬）、「信夫三山暁まいり」が行われる。大正時代には旧暦正月14日の夜から15日にかけて、信達地方のみならず宮城県、安達郡などからも多くの参詣者があり、不夜城と言われるほどの賑わいであった。暁まいりには重さ2トン、長さ12メートルの大わらじが羽黒神社に奉納される。その起源は不明であるが、飛脚問屋が健脚を祈るため奉納したのが始まりなどともいわれ、昭和初期には各地の集落で五穀豊穡を祈願し長さ5～7メートルのわらじが奉納された。そのような中で大笹生藪屋敷地区で大わらじを製作し奉納するようになり今に伝えられている。現在は御山地区で作られ、泉、森合、福島駅、稲荷神社、パセオ通り、信夫山黒沼神社前を通り、信夫山を登り羽黒神社前の急坂を登るコースである。

信夫山は、自然・歴史・民俗など信達地方の人々にとって深い関わりを持つ身近な宝の山である。